

(書評者)
パリ第8大学院博士課程／
京都博愛会病院
橋本和樹

『作業療法の曖昧さを 引き受けるということ』

齋藤佑樹、上江洲聖＝著

2023年10月発行
3,520円(本体3,200円＋税10%) 医学書院



漫画と侮るなかれ。医療・ケアの曖昧さを分け合う本

「曖昧さに耐える」これは医療やケアの分野で最も重要なことのひとつと言えるでしょう。この本は、この「言うは易し……」なテーマに挑戦しています。しかも漫画で。ホラー映画の「なんだ……猫か」よろしく、「なんだ……漫画か」と甘くみていると次のカットで……バンっ！ ということはさすがにないですが、漫画と侮るなかれ。実践に根ざした文章のおかげで内容は充実、そしてとても読みやすい。

この本から1つトピックを取り上げるならば、臨床を言語化することの重要性です。OT 実習では今でも職人的な「背中に学べ」スタイルがないわけではないでしょうが、教えることとは別にして、日々の実践を言語化することは臨床家にとっても非常に重要なことです。

本書の舞台は、病院。実習生の野原さんと作業療法士 (OT) の花城さん、そして患者さんたちとのやりとりを通して物語は展開する。OT の悩みや迷いが漫画にしっかり描かれながらも、花城さんは「何を考えているかわからない」キャラらしい。だからこそ彼女にとって、実習生に教えることが大切な作業 (occupation) になっている――。

花城さんは、患者さんや野原さんに質問されることによって自分の考えを言語化する機会を得ています。野原さんとのやりとりで花城さんが見せた笑顔 (第二話) から、そのことが読み取れます。当たり前ですが、OT もうまく伝われば嬉しい。

しかし日々の臨床で野原さんのような熱心な「聴き手」を探すのは思いのほか難しい。同僚はみんな忙しく走り回っています。だからこそ実習生や患者さんという、いわゆる「作業療法の素人」から放たれる素朴な質問によって、作業療法士は日々の当たり前を言語化し振り返ることができるのです。

フランスに、“治療環境を治療する”精神医学の運動「制度を使う精神療法 (P.I.)」があります。P.I. では、スタッフが「そこで何をしているのか」をミーティングで言語化することで、治療環境の治療が図られます。そのミーティングには、患者、非医療職も含め多様な人が参加します。そうすることで専門職の専門性を脱神秘化することこそが、ミーティングの目的の1つだからです。そのためには「素人」の素朴な質問と、そんな質問を気軽にできる軽やかな「雰囲気」が重要なのです。

最後に、この本を読んでいる間、ずっと私の頭の中には「問い」がありました。それは「OT の曖昧さを引き受ける」のは誰なのか？ というものです。OT？ OT を志す人たち？ 一緒に働く人？ 患者さんやその家族？ おそらくそれはこの本を書いた著者たちであり、この本を手にした私たちなんだろうと思うのです。漫画に登場する人たちだけでなく、いろんな人がこの本を手にして医療やケアの「曖昧さを引き受ける」ことについて感想や意見を誰かと分け合ってくれると嬉しいです。

精